

巡礼のすすめ

カトリック名古屋教区 殉教者顕彰委員会 鄭 有喆

「三人の子供と一緒に全国の聖地を巡礼しながら、私たち夫婦は私たちと子供たちの一生を神様に捧げ、神様のみ旨に従う生き方を送れるようにしてください、と祈りました」。子供たちを連れて家族皆が聖地巡礼をした後、訪れた聖地での感想を書き記した『光の中に』という本の序文に載っている著者の言葉です。この本の著者は、子供たちに「この世で最も大事なのが信仰である」ということを知らせてく聖地巡礼をする決心をしたと述べておられます。多くの人が時間さえあればたずね歩く時代に、子供たちを連れてあちこちの聖地を訪ね歩く姿は想像するだけでも立派で美しいものです。

記憶もかすかな昔のことですが、私も一ヶ月間聖地巡礼をしたことがあります。若い時期、不透明な未来に対する不安と信仰に対する不確かさでさまよったとき、その突破口として聖地巡礼を選びました。当時、方々にある聖地を隅々回りながら聖人たちの行跡を読み、殉教者たちの生き方を黙想し、神様が私を導いてくださることを切に祈りました。勿論、聖地を巡礼したからといって、私の人生が急に変わったことはありませんでしたけれども、独りで苦行を積むように、真冬の寒さの中を歩き回る巡礼の道は、殉教者に対する思いを新たにすると同時に信仰に対する力となっております。

巻頭言にあるように、この国では、様々な地域で数多くの「信仰の先輩たち」が命を賭して信仰をあかししました。日本の二十六聖人をはじめとした大勢の殉教者たちが私たちの教会の基礎になっているのです。

日本の教会がこのような殉教者たちの堅固な信仰の上に建てられたことを顧みるとき、大変心強い思いがします。ペトロ岐部と一八七殉教者の列福を機に、わたしたち日常の信仰生活には縁遠いと思われがちだった殉教への認識が、いつきに深まってきたように思います。その思いが冷める前に、殉教地史跡を一度訪ねてみたらいかでしょうか。

『あかしする信仰 東海・北陸のキリシタン史跡巡礼』は、殉教者顕彰委員会の委員たちが実際に訪ね、また集めた資料をまとめたものです。この一冊の本を携えて巡礼の旅に出かけて下さるならば、発行に関わった方々が流した汗も少しは報われるに違いありません。多くの人と一緒に巡礼地を訪ねるのも良いでしょうけれども、おひとりで、または家族と一緒になら、いつそう良いのではないかと思います。東海・北陸のキリシタン史跡を巡礼しながら、信仰をあかしした殉教者をただ一人でも、自分自身はもちろん子供たちの記憶の中に刻むことができれば幸いです。

二〇二二年十二月